

2020年9月

聖句随想・折々の言（ことば）

「望さんとラザロ」

牧師 森 言一郎

イエスがそこに居られるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。

（ヨハネによる福音書 12章9節）

エルサレムまで 3 kmの所にあるベタニア村に暮らすラザロ。彼の姿はヨハネによる福音書 11 章と 12 章だけに描かれます。

聖書が伝えるラザロという人は、ひと言も口を開かない。彼は徹頭徹尾、受ける側に見えるのです。ラザロは自分一人では何も出来ません。マルタとマリアという二人の姉たちの看護、あるいは介護

を受けるだけでした。しかし彼は、姉たちの祈りによってイエスさまと出会い、一度は墓におさめられ皆が諦めたにもかかわらず、よみがえります。ラザロは、その時にも何も言葉を発しない。彼の体をグルグル巻きにしていた布をほどいたのも周囲の人たちでした。もう少し言葉を添えるならば、彼は本当に無力な存在に見えるのです。

*

けれども、神さまはラザロのような存在を通して御業を起こされます。やがてラザロは群衆の注目を集めます。「それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。」(ヨハネ福音書 12:9) とある通りです。

彼は、何かをなすわけでもなく、語るわけでもない。ただ、その存在を通して、キリストの恵みを証しし始めるのです。私は、ここには神さまからの強烈なメッセージがあると思わずにはおれません。私たちの希望がある。

*

私は、6月26日(金)に洗礼を受けられ、旭東教会の一員となられた25歳の青年・望(のぞむ)さんの存在の重みについて思い続けています。いや、これからもずっと何かを感じるであろうし、我々は様々に努力しながら心に刻み続ける必要があることを思わざるを得ません。

望さんは、岡山県内の、ある意味、施設に近い病棟でこの6年近くお過ごしです。望さんのことについては、今号の『緑の牧場』に、お母さまの佐藤寿子さんが記されるそうですが、望さんは、おそらくその生涯を同じ病院内で送り続けるのだと思います。

望さんは産声すら上げることが出来ない状態でこの世に生まれ出でられ、重い障がいと共に現在に至っておられます。お母さまの寿子さんは一年余りの求道生活を経て2017年4月に旭東教会で受洗。きょうまで信仰生活をしっかりと深めておら

れることは、皆さんもよくご存じのことと思います。
す。

*

寿子さんが、ご家族の了解を得て、「病床にあり続けている息子の望も、クリスチャンとして生きて行くことは出来ないのだろうか」と明確に思い始められたのは、たぶん、一年前のことだったはずで

す。寿子さんは、望さんのお身体の中に埋め込まれている、単純ではあるけれど大切な機械の入れ替えに伴い、大学病院にお世話になった際に、高熱が続き、これから先、その命を保ち続けることに限界があるのでは、と気付かれたご様子でした。

当時の祈禱会でも我々は覚えて祈りました。寿子さんが、息子さんの望さんをご自宅でその一切の看護・介護をしながら歩いてこられたことは、我々には想像を絶することなのですが、その約20年間においても、救急車で病院に駆け込むことは数

え切れないほど多かったと伺ったことがあります。

*

長年の闘病を経て、いつしか望さんのお身体
の硬直は進みました。これまでドクターが
当たり前にされていたことすら出来なくなってきた
現実に直面され、寿子さんは、神さまに委ねる
しかない、という信仰的な気付きを与えられたの
でした。

望さんは成人されている大人です。しかしそうではあっても、望さんは、自ら信仰を言い表すということは基本的には出来ません。とは言え、以前、病棟をお訪ねし、枕元で手を軽く握り、肩を軽くトントンとたたきながら賛美歌を歌った時も、洗礼式の時もそうでしたが、望さんは嬉しそうでした。

いや、私などには嬉しいのかどうか本当は分からないのです。寿子さんが、息子は何かしらの嫌な気持ちをもっているときは、緊張し、脂汗が出た

りしますから、と教えて下さった。それとはかけ離れた状態がそこにはあったのです。

*

それだけではありません。あろうことか、寿子さんが我が子が生まれてから一度たりとも見たことがない姿を、教会のメンバー数名で訪問した時に見せてくれた。

望さんは、枕元で聞こえて来る賛美歌を聴きながら、すやすやと眠り始めたのでした。それは、神さまの福音の訪れを望さんが喜び、安心して、力を抜いて居られることの何よりもの証しだったのです。

*

私が牧師として、具体的に望さんの洗礼式の準備を始めたのは、たぶん 6 月の上旬だったと思います。

自ら信仰告白をすることはおろか、たとえば「望さんは賛美歌がお好きですか？」と尋ねても何も答えが返ってこない方の洗礼式はどのように進めるのか。考えてはそのままにし、また、思い巡らしながら過ごしていました。

*

文 献にもあたり、礼拝学やキリスト教教育にたずさわっておられる神学校のお二人の現役の教授であり牧会経験の豊富な先生方に助言を求めました。周囲に前例などありません。

少し重なるところがあるとするならば、それは〈幼児洗礼〉でした。生まれて間もないお子さんに、親の信仰にある願い求めに応じて、親御さんの信仰とその子の成長を共に見守っていくことを約束する教会員の信仰を支えにして、責任をもつ覚悟をもって、その子に洗礼を授ける。それが〈幼児洗礼〉です。その方向で進んで行こうというのが結論でした。

*

以下が、実際に洗礼を授ける5日前の礼拝で
交わした、教会員の誓約の式文です。洗礼
式は望さんが居られない日曜日の礼拝からもう既に始まっているのだ、と位置付けた結果でした。

2020年6月21日 日曜日の礼拝にて

●牧師 あなた方は、イエス・キリストがあなた方の救い主であると、心から信じますか。

◆親・教会員 「信じます。」

●牧師 あなた方は、父・子・聖霊なる唯一の神を信じ、神の言葉に従って生きることを願いますか。

親・教会員 「信じ、願います。」

牧師 あなた方は、望さんが神の恵みの契約のうちにあることを信じ、望さんが洗礼を受けることを願いますか。

◆親・教会員 「信じ、願います。」

牧師 あなた方は、〇〇望さんを教会の信仰生活の中で認め合い、主イエス・キリストに従って共に生きることを約束しますか。

◆親・教会員 「はい、約束します。」

教会員一同 起立

●牧師 あなた方は旭東教会の一員として、今週、6月26日(金)午前10時半、▼●病棟にて洗礼を受け、キリストのみ体なる教会のひと枝に加えられる○
○望さんを、絶えず愛と祈りをもって覚え、共にキリストの教会のわざに参与し続けることを約束しますか。

◆親・教会員 「はい、約束します。」

「式文」はここまで

*

➤ の誓約を携えて、私は6月26日(金)に洗
➤ 礼式に臨んだのです。私たち旭東教会が望さんに代わって信仰を告白し、生きていく約束をした。

これはおそらく、前代未聞の出来事なのではないか。普通ではない道を歩き出した。このことを忘れてはならない。旭東教会は望さんと共にあり続けることを、主の導きによって誓約したからです。

*

洗 礼式当日、二号線は少しの渋滞もあり、私が運転する車に同乗していた 5 名は病院の駐車場から急ぎ足で玄関に向かいました。病院に入ることも、コロナ禍の事情から当然かなり厳しいものでした。検温がもちろんありました。

病棟のスタッフの出迎えを受け、出掛けて行ったのは病院のかなり奥まったところにある人気はないけれど明るいロビーでした。

*

—— 同は問診票への書き込みを求められ提出。私もガウンをまとい、大急ぎで身支度をして洗礼式に臨もうとした頃に、薄いグレーの半袖のポロシャツ姿の一人の女性が現れました。

その方は、望さんがお世話になっている主治医で

した。40歳過ぎ位の方に見えました。ほぼ確実に、洗礼式の二ヵ月近く前に、母親の寿子さんが、「かくかくしかじかで、息子がクリスチャンとなるための儀式を病院のどこかで行うことを認めて頂けないでしょうか」というお願いを病棟スタッフの方に申し述べた際、最終的に、「問題ないですよ。そう伝えて下さい」とあっさりとは決断された責任者であるドクターでした。

*

そのドクターは、寿子さんに話し掛けました。

「私も楽しみにしてここに来ました。望さんの枕元にクリスマス物語を躡す小さな聖家族の人形があって、もしかして、といつも思っていました。実は私もクリスチャンなんです。日本基督教団○○教会の。でも、コロナの影響で、こういう仕事をしていることもあり、礼拝に行くこともずっと出来ず、きょうの洗礼式にはどうしても立ち会わせて頂きたいと思っていました」。

そのような声が聞こえました。

私はえーっそうだったのかあ、と思いましたが、時間も迫っていて、それ以上頭が回りません。

とにかく、無事に洗礼式を終えなければ、と思いながら、お部屋からストレッチャー型の車椅子に乗って出てこられていた望さんの所に向かいました。ロビーには、〇〇正さん、〇〇清美さん、〇美樹さんら 3 人が待機しました。同席は最小の人数しかコロナのことがあり認められていなかったのです。

*

病棟の建物は陽射しが強く感じられました。屋外の木陰の元、寿子さん、クリスチャンのドクター、〇〇安佐子役員が洗礼盤を持つ中、洗礼式は粛々と進みました。

望さんは当然横たわったままですし、プラスチッ

ク製のフェイスガードでしっかりお顔も覆われています。車椅子を中腰のまま30分近くの間支え続けるスタッフと、大きな日傘を差すにスタッフに守られていました。

授洗直後でしょうか。うっかり、私が望さんの近くに立ち続けていると、「すみません。もう少し離れて下さい」という声が掛けられました。洗礼式が終わり、寿子さんの感謝の言葉を聴き、そして、クリスチャンドクターにもひと言、お話して頂きました。

*

洗 洗礼式が終わってからどれくらい時間が経ってからでしょうか。

私はふと、「あれっ？何かおかしい。あの洗礼式は考えられないことが連続して起こっていたのでは」ということに気付きます。

それは言い換えるならば、話が出来すぎていた、

ということでした。冷静に振り返ってみると、新型コロナウイルスを我々は持ち込む危険性があり、病棟で集団生活を送っている望さんが、万が一でもコロナに感染してしまったらどうなるか。本当に大問題なのです。

普通ならば、病棟スタッフは寿子さんからの相談を聞いたとき、「お母さん、今は、時期が時期ですから、お気持ちはよく分かりますが、今回ばかりはご遠慮頂きたい。これが病院側のお答えです」として門前払いにしてもおかしくなかったのです。

*

私は、私なりに一生懸命に準備し、祈りつつ備えました。けれども、今回の〇〇望さんの洗礼式を無事に執り行うことが出来たのは、そもそも、我々の力や努力でもなんでもない。

イザヤ書 55 章 8 節以下に、「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり わたしの道はあなたたちの道と異なると 主は言われる。天が地を高く超え

ているように わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは あなたたちの思いを、高く超えて
いる。」とあります。

道を備えて下さったのは神さまだった。それが、
私たちに示されたことなのです。ドクターの下
のお名前は「温」と「恵」が含まれていることを後
で知りました。あたたかい恵みが備えられていた
のです。

何とも不思議なことが起こるものです。いや、こ
れだから、クリスチャンであることをやめられな
い、とまで私は思います。

*

2020年11月号の『信徒の友』の「日毎の糧」
の教会の祈りに、70字以内の原稿を求められ
て、私は以下を編集部宛にメールで書き送りました。

【祈りの課題】「生まれつき重い障がいと共に生き

てきた24歳の青年の受洗によって示されたみ業に深く感謝し悔い改めました。地域に根差す教会としての成長を願います。」と。

すると、以前から知っている編集者から応答がありました。

「祈りの課題を読んで感動しました。障がいゆえにイエスに触れる機会も限られていたことと思います。そのような中で、よく導かれたと、森先生に働いた神の御業を想います。」と。

*

他にも、偶然、こんな嬉しいことがあったのですよ、と教会の近況をお知らせした鳥取県内の〇〇教会・〇〇みどり牧師からも、感動の言葉と「祝詞」が届いたことは、既に皆さんにお知らせした通りです。

神学生時代の私の経験からすると、洗礼式前に問合せをした、日本聖書神学校のお二人の教授は、

やがて伝道・牧会の実践の場に赴くために日夜学びを続けている神学生に、今回の〇〇望さんの受洗に関わる話題を取り上げられる可能性は高いと思います。

神学生に対して、「重い障がいをもつ方の受洗について、ご家族から相談があったら、皆さんは、どのような準備を教会で進めたら良いと思いますか？」と、キリスト教教育や礼拝学などの講義の中で共に考える機会をいつか持たれるのでは、と想像するのです。あるいはまた、今回の出来事は、広く、各地の教会の方々とも共有しながら、しっかりと証しして行くべきことではないだろうか、と考えるのです。

*

1年、3年、5年が経ち、「その後、あの青年はお元気ですか？」というお声掛けを頂くことがあるかも知れません。

私たちは大きなことは出来ないけれど、ちいさな

ことに誠実に忠実でありたい。そのための一步を、ここに多くの字数を割いてでも、旭東教会の教会報に記しておきたい。

ラザロの物語に重ね、私たちの福音の物語を共にかみ締め、感謝し、苦勞しながらでも生きて行きたい。それが、私自身の牧師としての責任ある、その後の一步だと考えているのです。end